

急性骨髄性白血病の治療中に好中球減少性腸炎を発症した2例

内藤 淑子¹⁾, 佐藤 栄一¹⁾, 猪狩 洋介¹⁾,
中島 勇太¹⁾, 工並 直子¹⁾, 勝屋 弘雄¹⁾,
松岡 信秀²⁾, 高松 泰¹⁾, 竹下 盛重³⁾,
田村 和夫¹⁾

¹⁾ 福岡大学病院 腫瘍・血液・感染症内科

²⁾ 福岡大学病院 消化器外科

³⁾ 福岡大学病院 病理学

要旨：急性骨髄性白血病（acute myelogenous leukemia, AML）の治療経過中に好中球減少性腸炎（Neutropenic enterocolitis, NE）を来した2例を報告する。1例目は62歳の男性でイダルビシン，シタラピンの寛解導入療法を行い10日目に右下腹部痛を来した。好中球は5/ μ lでCT検査にて虫垂炎の所見を認めた。保存的治療に反応せず虫垂切除術で軽快した。2例目は22歳の女性で9日目に腹痛が生じ，画像検査で上行結腸に炎症像を認め絶食，輸液，抗菌薬で軽快した。共に地固め療法に移行し，腸炎の再発はなく良好な経過である。NEの治療で，手術介入の明確な指針はないが，手術適応があれば炎症が広がる前に速やかに外科的処置を行い，保存的加療を行う場合は症状や腹部エコーやCTの画像を繰り返し確認し，外科医と相談しながら経過を見ることが安全であると考えられる。

キーワード：化学療法，好中球減少性腸炎，手術，発熱性好中球減少症，ガイドライン